

《曾田三郎『中華民国の誕生と大正初期の日本人』合評会》

140318

コメント：「大正政治史の再検討：立憲制を中心に」

布川弘

はじめに：曾田先生の二著書が提起したもの

1. 立憲制をどのようにとらえるか：政府組織・行政組織のあり方の問題  
中国の南北両勢力、日本の諸政治勢力に共通した課題 制度と政治対立の相互関係  
「立憲国家の建設と憲政の実施という共通の舞台」（吉野作造、p. 272）
2. 日本と中国の相互関係から立憲制の歩みをとらえる：政治家、知識人、ジャーナリズム  
輿論の重要性 日中が相互に影響しあって輿論が形成される 「政治社会史」と国際関係史
3. 輿論の性質：扇情的な要素 非合理性 社会的文化的な文脈の重要性 制度と「社会的な力」  
袁世凱に対する「嫌悪」 「対人立法」 そうした見方に距離を置く人々の存在 多様性

## I. 日露戦争の意義

1. 「憲政」の再定義（有馬学）
  - ① 日比谷焼打事件 1905.9：「大正デモクラシー」の起点（松尾尊兌）  
憲政の基盤 排外主義的民衆運動 「国民外交」 「憲政擁護」・「閥族打破」
  - ② 国家目標の喪失、非国家的利益の噴出（三谷太一郎）  
利害対立の深化と拡大 新たな統合の課題 cf. 国民統合論 「情意投合」論
2. 帝国の形成：「万国対峙」論の新たな展開
  - ① 中国の立憲国家形成への影響  
明治憲法体制の参照 行政権 立憲君主制のモデル→近代天皇制のアナロジー  
中国の独自性に注目（有賀長雄）
  - ② 中国への影響力行使を公然と正当化する議論の登場  
民衆的な排外主義＝中国蔑視 アジア主義 「特殊利益」論  
そうした考え方に批判的な言論の存在

## II. 「大正デモクラシー」とは

1. 大正政変の構造
  - ① 「民衆的示威運動」：社会運動、普通選挙運動へのつながり（松尾尊兌）  
選挙権の拡大・「民衆」の政治参加を評価 民主主義 ＊戦後歴史学的な視点
  - ② 「国民主義的対外硬派」：帝国主義と国民主義（宮地正人）  
「強力国家」への志向 M・ウェーバー『国民国家と経済政策』  
行政機構の強化の問題として解釈し直す必要
  - ③ 憲法に支えられた諸機関の対立と競合（坂野潤治）

中国と同一の課題 日中の相互関係が強く作用

## 2. 日中関係から見た大正政変

### ①「憲政擁護」「閥族打破」を叫ぶ勢力の南方派支援、対中国強硬論

アジア主義的な考え、「東洋の主人公」(副島義一の考え方)→臨時約法 法制院の法制顧問

### ②袁世凱政権を交渉相手として認識している勢力

「閥族」と一括りにされた勢力の再評価が必要:「山県閥」・「薩派」など、「官僚派」

### ③対中外交と「満蒙問題の解決」

桂新党＝「立憲統一党構想」(立憲同志会、憲政会、民政党):対中外交の統一(千葉功)

## III. 第一次世界大戦と中国・日本

### 1. 「天佑」の政治史的意味

#### ①諸機関の対立と競合の継続と発展

明治憲法に規定された政治対立であることを再確認 立憲制という共通の基盤

明治憲法の運用＝「憲政」の問題 「非立憲」言説を注意深く検討する必要

専門官僚制の確立、外交の一元化(千葉功『旧外交の形成』)

#### ②山本権兵衛内閣・第二次大隈内閣・寺内内閣・原内閣の評価

行政機構の強化が政党内閣制の問題に収斂される

責任内閣の制度的な保証が無い 国制に占める議会の位置を過大に評価できない

憲法を支える「社会的な力」の重要性 議会制・普通選挙への期待と落胆

内閣の短期間で交替 「社会的な力」・「護憲派」・右翼団体の影響

#### ③袁世凱政権の絶頂期 1915 年半ば

日中ともに行政機構を強化するチャンス

### 2. 立憲制の挫折

#### ①中国における政権内部の対立:臨時約法のもとでの統治諸機関の権限とその行使

臨時約法が効力を失う(1917.7.) 南北間の分立・対立の深刻化 広東軍政府

日本の対中国政策・言論の影響 林権助の回想(p.189)

#### ②日本における立憲政治の動揺

憲法に支えられた諸機関の対立と競合が回避できない

ロシア革命と米騒動の影響: 革命勢力に対する過剰な警戒

右翼テロリズムとアジア主義の関係、「東洋のモンロー主義」(小川平吉)

おわりに:戦争と革命の時代への展望

### 1. 戦争状態による行政機構の強化

「強力国家」化の歴史的な解答 日中双方の問題 第二次世界大戦の構造

### 2. イデオロギー、理念の重要性